

2018年1月1日 元旦礼拝ショート・メッセージ

聖書:詩篇103篇1-14節 題:「新年に最初にすべきこと」

序 論

- まずは、あけましておめでとうございます。旧年中はお世話になりました。新しく迎えた2018年もどうぞよろしくお願いいたします。
- さて、日本では、毎年、新年には「初詣」と言って、沢山の人が、神社、或いはお寺に参拝します。その総計人数は、一億近いとも言われます。人口1億2000万と言われる日本で、これは驚くべき人数です。
- これは、異教国である日本人の習慣ですが、このように、新しい一年を、神様への礼拝をもって始めるという習慣は、クリスチャンとしても大切なことです。
- その理由は、第一に、このような神の前に新年を祝う礼拝の習慣は、旧約聖書の中でも、イスラエルの人々が、「ロシュ・ハシャナ」として守ってきた聖書的行事だからです。
- また第二の理由は、聖書は、すべての「物」「事」の最初、「初物」を、まず神に捧げることを強調しているからです。事の「最初」を捧げることは、その後続く全部を捧げることの象徴であり、その意志の表われだからです。その意味で、一年の初日、元旦に、時を捧げて、神様を礼拝することは、聖書的に大切です。
- それでは、このような「初詣」、或いは、「元旦礼拝」で、「すべきこと」は何か？！
- 今日は、それについて、詩篇103篇から一緒に考えたい。

本 論

I. 一年の最初の礼拝ですべきことは何か？「感謝する」ことです。

A. このことで、最近、ビックリしたことがあります。

1. それは、日本のテレビを見ていた時である。新年を迎える日本の様子を描く番組でした。
2. その中で、日本の「初詣」について神社の宮司のような方が説明する場面があった。その一つに、こんな質問があった。それは、「初詣ではいけないことは何だと思うか？」でした。
3. 答えは、「お願いすること」であった。意外や意外！ 初詣では、お願いをしてはならないと言うのである。多くの人が、初詣は、新年のための祈願、お願いをするときだと思っています。
4. ところが、事もあろうに、名のある神社の宮司が、専門家として言うには、それは、初詣ではタブーだと言うのです。お願いをすることは、少なくとも、初詣での中心ではない、と言うのです。
5. それでは、初詣では、何をやるのでしょうか？ 初詣の中心は何なのでしょう？ その宮司は、初詣で第一にするべきことは、新年を迎えるまでに、神様がしてくださったことを思い、「感謝することだ」と言う。

B. 聖書も、ピリピ4章6節でこのように言う。

1. 「感謝をもって捧げる祈りと願いによって、あなた方の願いごとを神様に知っていただきなさい」と。
2. 即ち、聖書は「祈るとき、願うときも、その前に、まず、感謝して、感謝の心をもって、お願いしなければならぬ」と言うのです。

C. 詩篇103篇2節後半も言う。「主の良くしてくださったことを何一つ忘れるな」と。

1. 「主のしてくださったことを何ひとつ忘れないで覚える」。それは、主への「感謝」の奨め以外何のもでもない。
2. 1-2節に、「主をほめたたえよ」と言う奨めが3回も出て来る。
3. この詩篇の作者が3回も「主をほめたたえよ」「主を賛美せよ」と言えたのはなぜか？
4. 「賛美」は、そのすぐ後に続く、「主の良くしてくださったことを何一つ忘れない、感謝する心から生まれるのである」。
5. 「感謝」が「賛美」を生み出す。そして、そこに、「霊的な力」が生まれるのである。
6. マタイ21:16で、詩篇8:2を引用された時、イエス様が仰りたかったことは、正にこのことであつた。即ち、幼子の唇に備えられた賛美に敵を打ち砕く力があると言うのである。

II. それでは、感謝とは、誰に、何を、どのようになされるべきなのか？

A. まず、「誰に」の問題である。感謝は誰に表すべきなのか？ 感謝の対象は誰かである。

1. そもそも、ここにこそ、「感謝する」とことと、「喜ぶ」とこととの根本的な違いがある。

- (1)有名な I テサロニケ 5 章 16-18 節でも、「常に喜び、絶えず祈り、すべてのことを感謝しなさい」とあるように、「喜び」ことと、「感謝する」ことは二つの別のことである。
- (2)「喜び」ことは、自己完結の行為である。自分の内側にある嬉しい、感情である。
- (3)しかし、「感謝する」ことは、その嬉しい内側の感情を、その喜びをもたらしてくれた自分以外の他者に向かって表すこと、発することである。

2. それでは、具体的に、それは誰なのか？

- (1)私の後輩牧師の話：彼と私は、彼の中学時代、私の高校時代からの教会を通しての友人である。彼の家は母子家庭で、彼が中学時代に、新しいお父さんが家に入って来た。ある日、まだ、クリスチャンになったばかりの彼が、食卓で、お父さんを前に、勿論、黙祷ではあったが、食前の感謝の祈りを捧げた。義理のお父さんが、ムツとして、「お前、何してるんだ」と言った。「食事の感謝の祈りをしてるんです」と答えた。お父さんは言った。「誰にだ？」。彼は答えた。「神様にです」と。「お父さんは怒って言った。「誰のおかげで食べられていると思っているんだ?! 神様にでなく、俺に感謝しろ」と。彼は、私のところに来て、涙ながらに言った。「お父さんの言ったことどう思いますか？」と。私は言った。「お父さん、半分正しいと思うよ」と。「確かにお父さんが働いてくれているから食べられていること、それは事実だ。だから、お父さんに感謝しなければならぬ」。「でも、そのお父さんが健康で働けるのは、神様の守りと祝福があるからだ。それを神様に感謝しなければならぬ」。
- (2)一人で生きている人は誰もいない。私たちは、みなお互いに支え合って生きている。だから、お互いにお世話になっている人々に感謝するべきである。
- (3)しかし、そ戸で終わってしまっはいけない。そのような人々を私たちに与えて下さった神様、その人々を支えておられる神様に、感謝を捧げなければならない。
- (4)詩篇 103 篇でも、繰り返し言っていることは、「主」即ち、「神様」をほめたたえよ。である。
- (5)ローマ人への手紙 1 章でも、パウロは、罪の根本的特色の一つとして、「神様への感謝の欠如」を挙げている(21 節)。

B. 次は、「何を」感謝するかの問題である。

1. それは、一言で言うなら、「すべて」である。すべてのことについて、すべての状況において感謝するのである。それが、2 節で言う。「何一つ忘れるな」の意味である。
2. 具体的には、まず、毎日の日常に経験しているすべてであろう。健康が守られたこと、経済的必要が戦いの中でも、満たされたこと、仕事を与えられていること、・・・
3. 更には、3-6 節にあるように、病からの癒し、危険から守られたことなどを挙げるができる。
 - (1)それは、個人的には、今年、私たち家族にとっては、家内の交通事故であろう。
 - (2)良いことばかりではない。昨日も話していたのであるが、ここにおられる知子さんも、今年、日本への一時帰国の際、嫌な経験をされた。その日、2 時間近くもかかる飛行場にわざわざ行ったのに、手続きのミスと不親切から、結局その日は、出国できず、数日後？改めて帰国された。でも、そのことが、後から振り返ると、お母さまをよりよく助けることができたのである。
 - (3)それらのすべてを覚えて、感謝したい。
4. しかし、それらの中心は、或いは、すべての祝福の基礎、出発点は、神様が私たちに与えてくださる罪の赦しであり、神の子とされた恵みである。即ちイエス・キリストにある救いの恵みである。
5. そのことが、この詩篇の 3 節、8-14 節に記されている。(読む)
6. そこには、ただに、私たちの罪を赦すだけでなく、罪を犯してしまう私たちの弱さも理解し、ゆるし、受け入れてくださる神様の恵みがある。
7. 私たちは、神様の愛と憐みによる救いがあったからこそ、今、滅びないで、ここにいることを思いたい。それを決して、恵みなれ(馴れ、狎れ)したり、当たり前のことと、甘んじることなく、むしろその愛に感謝し、恐れおののいて、敬虔に生きていくものでありたい。

C. 最後に、神への感謝は、どのように表されるべきか？を考えたい。

1. ローマ 12 章 1 節でパウロは言う。「ですから、神の憐み、神の愛のゆえに、あなたがたにお願いします。あなたがたのからだを、・・・生きた供え物として捧げなさい。それこそあなた方のなすべき礼拝である」。

2. ここでパウロが言いたいことは何か？

(1)パウロは、ここまで、即ち、ローマ人への手紙の1-11章までにおいて、罪人である私たちに救うための、神様の愛による遠大な救済計画とその実践を論じて来た。そして、

(2)12章1節で、「**そういうわけですから、兄弟たち**」と言って、彼は、私たちに、その神様の愛による救い御業を指さしながら、その愛と恵みに応答するように呼びかけているのである。

(3)それは、全身、全生涯を神に捧げることへの励まし、奨励であった。

3. パウロは言う。「これこそがあなたがたのなすべき霊的な礼拝である」と。

(1)即ち、礼拝とは、単に、賛美歌を謳うことでも、説教を聞くことでもない。

(2)まことの「礼拝」とは、それらを通して、神様が私たちにしてくださったことへの「**感謝**」の**応答として**、私たちの生涯を、神様に捧げることである。

4. 私たちは、神様への感謝をどのように表すべきか？ 自分自身を、その生涯を、神様に感謝の生贄として捧げることをもって表すべきである。

結 論

- 私は、若いとき、神学校に行く前に、牧師になるための実地訓練として、3年間、丁稚奉公のようにして、牧師の家に住み込んでいた。そのときの仕事の一つに、牧師の家のお風呂を沸かすことがあった。それは薪で燃やす五右衛門ぶろであった。それまで、私は、薪でお風呂を沸かしたことはなかった。自分の家では、幼いときは、石炭であり(勿論、親が沸かしたのであったが)、大きくなってからは、ガスであった。だから余り薪で風呂を沸かすことにはなれていなかった。それで、しばしば牧師に色々注意された。そのひとつとして、「西郷くん、薪でお風呂を上手に沸かすためには、まず、前の日の薪の燃えカス、灰を完全に掻き出し、空気の流れをよくすることだよ。」とよく言われた。
- 私は、神様から頂いた祝福と恵みに感謝することは、これと似ていると思った。神様から頂いた恵み、祝福に感謝を十分に捧げないのは、前の日に勢い良く燃えた薪の残した灰を完全に掻き出さないと、好い加減にしているのと同じである。それでは、次の恵み、祝福が入って来ない。空気が悪いように、神様と私たちをつなぐ聖霊の流れも悪いからである。
- 今日、この元旦の礼拝で皆様とご一緒にしたいことは、
- 第一に、主の良くしてくださったことを一つも忘れずに、一つ一つ数えて、感謝すること
- そして、その中でも、何としても、主の救いのみ業に感謝すること。
- 第二に、自分自身と生涯を、神様への感謝の供え物として捧げることである。